

蓼の花

能村 研三

樛の葉

松や竹と同じように樛の葉は正月飾りに用いられる。床の間に飾る鏡餅も裏白を敷いたあと樛の葉を添える。樛の葉は布葉柄の赤い新しい葉が生えたあとに古い葉が落ちることから「譲り葉」ともいわれた。これにちなみ、恙無く代を譲ることができる祝木として、新年の飾りになくてはならないもので、縁起の良い木として知られている。

樛の葉は、新しい葉が成長するまで古い葉が落ちないことから、「世代交代」や「子孫繁栄」の象徴とされてきた。

「ゆずりは」は「樛」「譲り」「杠」「弓弦葉」「諭鶴羽」など多様な漢字があてられていて、どれも、神聖な木という意味合いが込められている。

平安時代には、大晦日に先祖の霊が帰ってくると信じられ、故人への供え物の敷物に樛の葉が使われたと

よく食べて癒ゆるに一途蓼の花
釣瓶落とし帰り上手はもうをらず
吊り石で醪を絞る露しとど
商誘と醤油の町に小鳥来る

樛の木は私の家の庭にはないが、隣の家の庭にあつて茎が赤い色をした葉が私の家の私道部分に落ち、昔から親しみを感じていた。隣の家は壊してしまったので、今はその木もなくなつてしまったのが残念である。先師登四郎も樛は好きだったようで、いくつかの句を詠んでいる。

冬はじめ格子とびらの電話室

食べ方の原点にあり熟柿吸ふ

からすみに口実いらぬ昼の酒

句集『枯野の沖』

樛の彼方の空の晴をよむ

句集『民話』

樛の柄赤きをたのむ齢かな
樛やゆづるべき子のありてよき

句集『羽化』

四句目の句は平成十年、八十五歳を過ぎて「沖作品」の選を私に引き継いだ年に詠んだ句である。

一の矢に四望の枯を引き絞る

灯の下に謀議を囲む鮫鱧鍋

能村 研三